

インド英語文学にみるシータの娘たち (Ⅱ)

Sita's Daughters in Indian English Fiction II

大平 栄子
Eiko OHIRA

パキスタンの作家、Tehmina Durraniの*My Feudal Lord* (1994) はDVの被害者が自ら語る貴重な記録であり、多くの女性に「沈黙」を破ることの意義を自ら実践して見せたという点からも重要な書であるといえる。また、Phoolan Devi (2001年の暗殺時はインドの国会議員) は伝記*Moi, Phoolan Devi* (1996) において、夫からの虐待、警官たちからの拷問、集団レイプ、「盗賊の女王」としての日々、投降、獄中生活からなる壮絶な人生について語り、女性としての誇り、カースト差別への闘士を失うことなく生き抜いた女性である。バングラデシュの作家Taslima Nasrinはコミュニナリズムを糾弾する小説、*Lajja* (1993) の出版によってイスラム教徒の怒りを買ひ、イスラム原理主義者の組織から死刑宣告を受けるが、脅迫に屈することなく戦い続けている女性である。

この南アジアの三人の女性に共通しているのは伝統的な女性の規範とされた生き方に抵抗し、信念を貫いたという点である。伝統主義者が提唱する女性モデルであり、かつ現代のインド人が男女を問わず理想とする妻・女性モデルとは、古典的叙事詩『ラーマヤナ』のヒロイン、ラーマの貞淑な妻シータである。上に述べた女性たちはこのシータモデルに対抗できる存在である。では、インド英語文学において、平凡ながら大衆的に認知されたインド版Jane Eyreのような自己主張する個性をもつ女性モデルを見出すことはできるであろうか。

インドでは日常的に人権侵害が行われているにもかかわらず、¹「伝説的沈黙」(*Women in Indian Society* 192) を破ることは極めて困難な状況が続いている。「夫を神のように敬い従うべき」とする規範、耐えるのが女性の本性であるという認識がはびこる社会において、圧倒的多数の女性はこういった状況を女に生まれたものの運命として受けとめ、虐待に対して沈黙を守る。こういった女性たちの理想の女性像は忍耐と「貞節」・純潔の象徴的存在であるシータである。「貞節」とは家父長制社会において女性のセクシュアリティを管理・支配するための伝統的手段であり、インドにおいてはブラーミンなどの支配カースト維持と家父長制度維持のために使われた。この視点からみると、シータは女性たちにとって抑圧的な身体イメージとなる。

この問題は、ヒンドゥー原理主義者たちの主張する伝統的女性の役割強化と、メディアによって喧伝されることによって作りだされる、伝統的女性のイメージ賛美の風潮によって、ますます解決が困難になっている。女性を男性の欲望の対象と見ることなく、対等なパートナーと考えるべきであると訴え、また、女性の教育の普及を主張したガンジーが現代女性が倣うべき手本としてあげたのが、シータであることを考えると、事態は複雑で深刻である。この不可能とも思える理想像の重荷に耐えつづけてきた多くの女性たちが、

はたして、このダブルバインド的状况にどのようにして対処できるのか。この幽霊のようにたちはだかるステレオタイプから解放されるには、どのような言説が有効なのか。シータモデルとは異なる、このイメージを転覆する新たな女性のモデルを求めるべきなのか、あるいは*Ramayana*の表層的テキストに潜む、反抗的・自己主張する個性的シータを読み取り、新たな神話を作り直すべきなのか。あるいは、男性とは異なり、女性たちはすでに隠れたシータのa rebel womanとしての可能性を見ているのだろうか。

インド英語文学においては、どのような女性の状況が描かれ、新しい「身体」イメージが創りだされているのだろうか。² インド英語文学をリードしてきた作家たちや80年代から活発化したインドの女性作家たちの活動の成果はこのような抵抗にどのような貢献をすることができたか。また、国外在住の南アジア英語文学の作家たちが、どのように母国の女性の状況を世界に発信してきたのか。「インド英語文学にみるシータの娘たち」(I)においてR. K. Narayan (1960-2001), Anita Desai (1937-), Bharati Mukherjee (1940-) のテキストについてはすでに検討をしてきた。本稿ではBapshi Sidhwa (1938-), Arundhati Roy (1961-) のテキスト、特に、女性たちの多様な人生とその共同性が描き分けられているGitha Hariharan (1954-) の*Thousand Faces of Night* (1992) に注目して、虐待される女性の現実とそれへの抵抗の物語を検討し、女性の身体がどのように表象されているかみていきたい。

II

まず、これらの検討に入る前に、前稿で見てきたテキストについて要約しておきたい。Narayanの*The Dark Room* (1938) においては、20世紀の英語文学をリードしてきた彼が、いち早くインドの家父長制度下の結婚生活における女性の隷属・疎外の状況——教育の不足、経済的依存、伝統的女性役割の強制、家庭への幽閉——を描き、問題提起した。夫に経済的にも精神的にも従属し、夫への献身を妻の義務と考えて生きてきた主人公Savitriが、家出という発作的反逆を実行するが、自立の能力の欠如と精神的麻痺を悟り、貴重なエンパワーの機会、Ponniとの女同士の友情を育む機会を永久に逃してしまう。

Mukherjeeは*Jasmine* (1989) において、17歳で寡婦になった主人公Jhotaが自分の運命を変えるためにアメリカに渡るという物語によって、寡婦差別の残るインド社会の慣習に抵抗する女性を描いた。と同時に、それがいかに稀な行動であるか、アシュラムに幽閉される彼女の母親の生活や灯油を浴び焼死した幼な友だちを始めとする寡婦たちの運命や、ダウリをめぐる虐待、自殺、殺人の示唆、反抗的女性への制裁などに見られる女性差別を意図的にそっけなく描くことで示唆している。寡婦の置かれた状況についてはS. Rushdieの*Midnight Children* (1981) にも記述が見られた。だが、このテキストでは圧倒的多数の寡婦の悲劇とは無縁の寡婦として、存在感を示すIndira Gandhiが登場する。彼女の断行した強制的不妊手術計画や真夜中の子供たち抹殺計画が辛辣な皮肉の対象になる度に、派手なヒップをゆらす寡婦としての描写が執拗に反復される。世間の目に触れることを極力嫌われ、幽閉生活を余儀なくされ、また、世捨て人のような粗末な寡婦の服しか纏うことを許されず、女性としてのセクシュアリティを強制的剃髪によって、象徴的に剥奪された寡婦というイメージを、華麗な政治の最高権力者である寡婦としてのイ

メージをもつIndiraによって書き換えるRushdie的戦略がそこにかがえる。

Desaiの*Fire on the Mountain* (1977) にも、wife-beatingと、老いた女性のレイプと殺害が鮮烈な身体表現で描かれる。このテキストには虐待される女性たちの出会いがあるが、心を開き、触れ合うことができない心理状況が描きこまれている。主人公Nandaとその幼な友だちIlaは心の解放へ導く決定的瞬間を逃してしまい、悲劇的結末を誘うことになる。過去から訪づれたようなIlaはNandaにとって彼女の虐待される妻として生きた過去の屈辱的秘密を暴く「運命的で脅迫的存在」であり、彼女の逃避的生き方に心の底から揺さぶりをかける存在でしかなかった。触れ合いの兆しを見せ始めた女性たちではあるが、虐待に傷つき頑なになり、孤独とプライドによって引き裂かれていた女性たちは永久に孤立したままである。虐待される女性たちのそれぞれの孤立した状態の描き分け方も印象的であるが、このテキストで存在感を示すのはIlaの「身体」である。不快な甲高い声を発するIlaは最初から嘲りの対象になる「身体」として印象づけられる。止めどなく飛び出すこの「声」はNandaの孤高の生活の静寂を引き裂く犯罪的な「声」として響き渡る。Ilaの子供のような小さな「身体」の“deformities” (137) が執拗に強調され、内反足の障害のある娘をもつgrainsellerの同情を誘い、市場の人々の無神経な嘲りを誘う身体として描かれる。そして彼女の人生の結末では、息絶え、レイプされるIlaの老いてしなびた「身体」は不恰好で年老いた女性ですらなくなり、「棒きれ」となって、貫かれ、押しつぶされ、壊滅させられる。だが、不思議なことに、ここまで彼女の身体は「物化」されるにもかかわらず、最後に最も人間的色彩の輝きを残すのも彼女のどこか、こっけいな、だが親密さを一瞬にして作りあげる彼女の身体である。村の男たちの脅迫に屈せず、自分の信念を貫くために行動した女性ということで、彼女はSitaの呪縛から自由であった。

Desaiのもう一つのテキスト*Fasting, Feasting* (1999) には夫と義母によって虐待され、灯油をかけられ殺害される妻のより凄惨な描写が見られる。主人公Umaの従姉のAnamikaである。だが、Umaは灰となって骨壺の中に収まっているAnamikaの方がまだみずみずしい身体のままであり、灰になってしまったのは、むしろ自分の方だとは思ふ。同年代の二人だが、Anamikaは25年間の結婚生活を送り、Umaは結婚とは無縁であった。Umaは自分の方が死んだような灰色の世界に幽閉されていると感じる。ダウリ殺人のような強烈な印象を与えはしないが、Umaの心の中でじわじわと進行する、灰色の死もまた、家の犠牲になる女性の置かれた状況をリアルに伝える。だが、このテキストではAnamikaの死はUmaと母親を結びつける。読経が止んだ時Umaの手を握る母は父権を帯びた抑圧的存在MamaPapaではない。Umaから慰められ、Umaを慰める、女同士の「絆」を築く関係へ一歩踏み出した母である。

III

Arundhati Royの*God of Small Things* (1997) のAmmuと彼女の母親もまたDVの被害者である。彼らはPappachiと呼ばれる昆虫学者の冷酷な計算された虐待に日々晒される。暴行を受け、家から追い出された日、彼らは決まって家の周囲の生垣に潜んでデリーの冷え込む夜を過ごす。ある時、9歳のAmmuは通気口を通して家の中にこっそり戻り、なによりも大切にしていた新品のゴム長靴を救出し、居間に戻るが、その時突然明かりがともさ

れ、父に捕まる。無言のまま父親は乗馬用のむちで彼女を打ち終えた時、母のはさみでそのブーツをずたずたに切り裂く。最後のゴムの切れ端が床に波打って落ちると、父親は無感情な冷やかな視線を向け、身をよじるへびの海原 “a sea of twisting rubber snakes” に囲まれロッキングチェアを幾度も揺らす。“rocked and rocked and rocked.” (181) というリズムがPappachiの感情のない冷酷さを刻むリズムになっている。娘と妻を折檻し、家を追い出し、それでも苛立ちは収まらずカーテンを引き裂き、家の中の物をけり、壊し、そしてゴム長靴のえさに引き寄せられてクモの巣に引っかかった娘を打ち据えたあげく、その宝物をずたずたにされる様を見せつける。ここに至ってやっと彼のサディスティックな支配の欲望はなだめられたのだろうか。彼はイギリス帝国の昆虫学者 “the Imperial Entomologist” で、孤児院などに積極的に寄付する寛大な有徳の人物として、世間では通っており、凶暴な暴力の犠牲となる娘と妻は屈辱を舐めた上、すばらしい夫、あるいは父をもっているという理由で周囲のねたみにも晒されることになる。

Ammuの経験する暴力はこれだけではない。彼女の夫もまた酒気を帯びると暴力をふるう。そして、それが子供たちにも及び始めた時、Ammuは夫のもとを去り、歓迎されざる実家へと戻る。夫の暴力とそれに抵抗するAmmuを描く場面はどこかコミカルだが、暴力と蜜月期の懇願という典型的DVの構成になっていることが示唆されており、深刻であることに間違いはない。髪をつかみ、殴る夫。だが、激しい動きに耐えられず失神したのは夫であった。Ammuは本棚に並ぶ本の中で最も分厚い本、*The Reader's Digest World Atlas* (42) を選んで夫の頭、脚、背中、肩などを思いっきりたたく。この暴行への嫌悪感はアルコールの不快な匂いと口にこびりついている嘔吐物の匂い、つまり「匂い」で表象されている。

だが、このSomeone Bigから生涯虐待され続ける犠牲者たちSomeone Smallに育まれる “a lofty sense of injustice and the mulish, reckless streak” (181) といった不敵な性格がAmmuの中に育つ。この性格が後にUntouchableとして接触を回避される被差別カーストの青年との禁断の愛、すなわち、“the laws that lay down who should be loved, and how” という愛の法の侵犯というテーマ、そして、そのために受けた凄惨な制裁による悲劇へと繋がっていく。この点で、340ページからなる本文のなかで数ページを占めるこのエピソードは重要な位置を占めるものである。虐待される女性たちと非人間的制裁を受けるUntouchableの青年とは共にGod of small things 「小さきものたちの神」を通してつながっている。

この鮮烈な印象を残す虐待の場面はさらに、前置きとして語られる、子供の頃に読まされ、すぐ無視したという本Father Bear Mother Bear stories (180) のAmmu解釈バージョンによって不動のものとなる。“In her version, Father Bear beat Mother Bear with brass vases. Mother Bear suffered those beatings with mute resignation.” (180) このMother BearのようにAmmuの母親は抵抗しない。Ammuは家に戻ろうとする娘を恐怖に駆られ、止めようと懇願する母親を軽蔑する。また、居間でゴム長靴が切り裂かれている時、窓の向こうに恐怖でひきつった母の顔が見えるが、Ammuは見ないふりをする。母は沈黙とSomeone Bigへの従順を選択し、その母の生き方を娘は否定し、Someone Smallの不敵、抵抗、尊大さを選んだ。Ammuは父親からの暴力の被害者であると同時に、母親が虐待されるのを日々「目撃」せざるを得なかったという点で、*Fire on the Mountain*のRakaと同

様に、精神的虐待に晒されていた。これらは被害者に恐怖、屈辱感、罪悪感を植え付け、彼らの尊厳を奪う行為である。だが、見てきたようにAmmuは反抗心と不敵さ、尊大さを育む。一方、Rakaは曾祖母のNandaから感じ始めた支配的な親密さを嫌い、荒涼とした風景の中での孤独を求めた。だが、徹底的にNandaを無視するRakaも使用人のRam Lalには身体の硬直を解き、彼の話に興味を示した。Ammuも恋人Veluthaに心を開き、双子の子供たちを必死に守ろうとした。だが、共に暴力の被害者であった母親との連帯は生まれえない。Ammuは恐怖で抵抗できない母親を軽蔑し、その恐怖にひきつった母親の顔を“ignored” (181) 無視する。

IV

Githa Hariharanの*Thousand Faces of Night*のMayammaもまた夫と、インドの家父長制社会の価値観・文化を内面化し、それを強制する義母からのDVの被害者である。DVとは、他者を性的、肉体的、あるいは精神的に暴力、脅迫などによって支配しようとする権力の悪用を意味する。嫁と姑の対立は女同士の戦いのように見えるが、義母に虐待される義理の娘といった図式は、家父長制の代理人が、その価値観を受容、実現しそこなった者への虐待であることが多い。いかにしてMayammaはこの暴力から生き延びてきたのか。どのようなサヴァイヴァルについての新たなヴィジョンを彼女が表しているのか。

このテキストはDeviという主人公兼語り手が一人称で語る一部と二部、三人称で語られる三部の語りと交差して挿入されるMayamma (Deviの婚家の使用人) 自身の語る忍耐の物語から構成される。二人は虐待される主な理由となる、「不妊」という共通の辛い体験で結ばれており、彼女たちの対話、交流、支え合いは“the proverbial silence.” (*Women in Indian Society* 192; *Stories of Dowry Victims: Sita's Curse* 119) というインド文化において、その「沈黙」を破る力を懐胎している。

「プレリュード」において、唐突に、だが、さりげなく、Mayamaの忍従の人生が「血」を流す「不毛な子宮」としての表象によって語られ、このテキストの主旋律へ向けて、前奏曲をかなで始める。子供の頃から祖母の物語を聞くのが好きだったDeviは、一方で、常に「なぜ？」と問わずにはいられない子供だったという、テキスト冒頭の語りの次に、最近Mayammaから聞いた話に対してDeviのいつもの「なぜ？」が続く。なぜそんな人生に耐えられたのかと問いかけるDeviに、彼女はしわだらけの頬に涙の滴が流れ落ちるほど笑い転げ、忍耐と苦痛に満ちた彼女の半生を、子供のように、なぜ、なぜと問い掛けるDeviをからかい気味に次のように語る。10年不安のうちに待ちつづけた「初めての息子」が亡くなった時、「私」は生まれて初めて“Why?”と、泣き叫び、一方、村の脂ぎった医者はまだ私の流した「血」に染まった手をして、ずるそうな目つきで前世で犯した罪までこの私にどうしろというのか、苦痛を耐えるのが女の努めではないか、ということばで口をにごす。一方、義母はわたしの両頬をひっぱたき、拳で胸と未だ腫れの引かない腹を幾度も打ちすえる。「なぜ」と泣き叫ぶ嫁に対して、怒りと恐怖の入り混じったことばで「女」ではなく、「不毛な魔女」(“The barren witch has killed my grandson” Prelude 2) となじる。「だから、デヴィや、なぜと言う時には気をつけなきゃいけないよ」と語りを結んだMayammaの歯の抜け落ちた顔には微笑が浮かんでいる。死産の壮絶さは、“his hand

dripping with my blood” (1) “my cowering, bleeding body” (2) と「血」を流す「身体」によって語られるが、「実際の語り手」のMayammaの語りはぶっきらぼうなまでに感情が抜き取られている。結婚したばかりの幼さが残るDeviと、姑の虐待やその他の人生の苦難に耐え偲んできたMayammaとの微笑ましい対話で終わる、ほんの1ページあまりの短いPreludeにおいて、男子の再生産能力で測られる女性の価値や、疑問をもつことを許されず、黙従することが義務とされる女性の状況が垣間見られると同時に、虐待される女性自らが語る語りと、それに耳を傾ける女性との印象深い対話によって、女性たちの密かな支え合いのコミュニティのヴィジョンが示唆されている。

この不毛性ゆえに虐待されるMayammaの人生の物語は何度も繰り返し語られる。次の描写はDeviの家出後も淡々と変わらぬ日常をこなすMayammaがDeviを一人想う場面のものである。新しいサリーを喜ぶMayammaに姑の嘲る声が飛ぶ。“What has your beauty done for you, you barren witch?” (113) と罵ったかと思うと、義母はMayammaのサリーを乱暴な手でめくりあげ、“My barrenness” (113)、不毛な腹部に真っ赤に燃え盛る炎のような挽きたてのスパイスをぬりたくった。Mayammaの身体を貪り尽す“devouring fire”、「炎」によって焼け爛れる“my entails” (113)。“I burned, my thighs clamped together as I felt the devouring fire cling to my entrails.” (113) 食を断って“your empty, rotting womb” (114) に息子が授かるよう祈れと姑からMayammaは命じられる。忠実に来る日も来る日も「懺悔のための苦行」の日々を送ってきた彼女が、不在のDeviに思いをはせながら、自らの過去を語る語りの出だしはこうである。“Devi, that child so easily moved to tears, what does she know of penance? They taught us well in the old days. Penance was my grey-haired school teacher.” (113) 思い切った行動にでた若い世代のDeviに対し、Mayammaの結婚生活は不妊ゆえにその存在価値も人生の楽しみも剥奪され、ひたすら豊穡の女神たちへの懺悔と苦行に明け暮れることになる。

現在の状況を語る三人称の語りに何度か中断されながら、やがて、義母に「腐れかけた」空っぽの腹と誹謗されてきた、「子宮」が女神に恵みを授かり、実りの兆候を示した時のことを、またMayammaは語り始める。“When the goddess blessed my womb and the seed ripened, what joy rushed through my blood!” (122) しかし“Then the blood came, too soon, too soon.” 早すぎる出血。そして「死にかけているわたしの息子」が村の脂ぎった医師の手によって引き出される時の苦痛はこう描かれている。“He shoved his greasy hand into my swelling, palpitating womb. I could feel the pull, excruciating pain of the thrust, his hand, my blood, my dying son.” (122) 「プレリュード」で語られた死産の場面がパリエーションを加えて反復されることによる効果は大きい。このような変化を微妙につけた反復によって、独特なリズムを産む技法はE. M. Forster (1978-1970) が得意としたところだが、Hariharanもこれを随所に用い、重要なモチーフを効果的に作りあげている。

Mayammaの「母性への欲望」“my greed for motherhood” (122) の重みによって垂れ下がってくる子宮。息子を提供する「子宮」としてのみ認知される存在としてのMayammaの幻想は逃走したがる「子宮」を引きずり出し、引き裂き、ごみの山のなかで腐らせるという自虐的、かつ、無意識・無自覚な反逆の形をとる。

My womb slips down, sagging with the weight of my greed for motherhood. I can feel it.

I need no doctor now. I know it well, its desire to escape. I could put my hand up and pull, pull. Tear it out and throw it on the garbage heap to rot. Raja has no use for it any more. He is reduced to ashes that I fed into the river's mouth. I push it back into place each time, a memorial to my aborted motherhood. (122-23)

Mayammaの全存在は「子宮」に還元され、息子を提供、再生産する子宮ならば、女神の祝福を受けた存在として社会的に認知されるし、さもなければ、彼女は「女」としての認知も取り消され、「怪物」となる。女の存在を子宮の再生産能力で測る文化を内面化している姑の視点から見ると、「自分の孫」を殺してしまった危険極まりない「魔女」となる。村の医師も不毛は前世の罪の証とみる視点に立っている。また、Deviが夫に勧められ通うことになった、最新の不妊治療にあたる現代医学に携る医師たちの視点もなんら変わらない。彼らの不妊の女をみる視点をDeviはこう解釈する——誰にもできる簡単なことで医師の手を煩わせる「愚か」な、女 (“...a stupid woman who couldn't even get pregnant, the easiest of accident?” “Look at the obedient, dutiful wives around you, they seemed to say.” 91) である、と。また、この近代医学の視線をDeviは正常な子宮をもつ「従順」で「義務に忠実な」女と、不妊の女とを分断するものと見る。それは、“swelling stomachs” (90) “Her stomach...flat” (90) というように、膨らんだお腹とぺちゃんこのお腹という記号で表される。

このように、不毛性は「危険」、「罪」、「愚かさ」不従順という意味を背負わされる。そこから「罪悪感」(115) は生まれ、子宮の中で育つ。しかし、Deviはその否定性を楯にとって消極的な反逆とそれを位置づけ直す。それは投げ捨てられ腐るに任せられる子宮という自虐的反応とも異なる。Deviは反逆する「肉体」 (“my rebellious body” 74) として自己を語る。女に期待される生殖能力の実現、再生産の役割への頑なな反抗は彼女の「空っぽ」の「子宮」によって表象されている。良妻になるために教育は役に立たないと考える夫は、Deviの知への欲求や仕事による社会参加についての提案をあっさり否決し、Deviの「身体」による抵抗に対して、不妊治療を提案する。子供をほしがらぬ夫に「なぜ子供がほしいのか？」と問うDeviを不審の目で見る夫。また、彼女は仕事で不在がちな夫が帰宅した時にさりげなく彼女のお腹に走らせる夫の視線を意識させられる。また、時折見せる夫の視線と華奢で女らしい妻が子供をほしがらないことが信じがたいといった彼のことばによって、Deviは自分が脆く、やわらかく解けてなくなってしまうように感じる。そして後に残ったのは “my stubborn, unrelenting womb” (93) だけであった。彼女の受動的抵抗の姿勢は不従順な「子宮」によって表象されている。良妻であること、そしてブラーミン・カーストの純潔を守るため男子を出産することを期待される結婚生活において、アメリカ留学によるMA取得やサンスクリット学者である義父に刺激を受けた知的活動への欲求は嘲笑され、キャリア形成への欲求も認められない結婚生活はDeviにとって、「犠牲のナイフ」が首元にぶら下げられている何年もの幽閉の日々を意味し、それがやがて首に食い込み、引き裂き血が噴出す日がくると思う。“I thought the knife would plunge in, slit, tear, rip across my neck, and let the blood gush, the passion of the sacrifice whole, all-encompassing.” (54) だが、その前に彼女は “guardian angel” と見なしてきたまだ見ぬ義母Parvatiammaと同様に家出という反逆を試みることになる。

Mayammaは12歳で結婚する。義母は“check Mayamma’s insides” (80) 身体の内部までは調べることはできないので、「たくさんの男の子の孫」が産めるという占い師の約束で満足する。結婚1年目はMayammaの“slim waist intently for the first year” (80) とあるように、その兆候を探るべくお腹を見つめてすごすが、2年目になると、義母は不平を言い始める。夫との愛のない結婚生活は次のようにコミカルにあっさり描かれる。“...husband woke her up every night, his large, hairy thighs rough and heavy on her, pushing pushing.” (80) Deviが頼りにする義父Babaは彼女に伝統的女性の役割、生き方について論ずる人物であるが、夫への献身こそが“woman’s only path toward heaven” 女性の唯一の救済への道であると語り、『マヌ法典』にみられる、子のない女性でも夫に献身することで救われるとする記述に呼応する考えを示す。だが、語りは“A woman without a child, says the sages, goes to hell.” (81) と語り、「不妊」の女性が精神的虐待の対象にされてしまう根拠を示す。³ Mayammaは義母に強制されるあらゆる「懺悔」の儀式を「昔からの友人」を歓迎するように、あるいは“grey-haired school teacher” (113) とし、実行し、また、日々繰り返される罰を甘んじて受ける。来る年も来る年も彼女は女神に祈りを捧げる日々が続く。早朝4時に起き、池に行き、冷たい水で沐浴し、祈る。“She tore my new saris and gave me yesterday’s rice to eat. What is the use of feeding a barren witch?” (112) 塩や香辛料を断ち、リングをビャクダンとミルクと渴望の涙で濡らすMayammaに、義母の情け容赦ない仕打ちは続けられる。子も生めない「魔女」を肥やすのは無駄だとして、残り物を与えられるMayamma。胸を刃物で切り裂き、リングをその血で浸し、息子を授かるよう祈れと強要する義母。インド社会において息子の母は最大の尊敬を受ける。⁴だが、これは女性一般が尊敬されていることを意味してはいない。同じ母でも娘ばかり産む母は疎まれる。家父長制社会を維持するための男子を出産し、育てる、忍耐強い母である限りにおいて、受ける尊敬にすぎない。Mayamma自身この考えに疑問を持たず、Deviのような意識的抵抗もしない。義母の虐待を恨むどころか、義母にわびる時に控えめな声をだす以外は沈黙を守る。だが、すでに見た、彼女の「子宮」についての幻想が、女性に強要される沈黙と従順を裏切り、一人歩きをする。

10年後に生まれた息子の死。次に生まれた息子も、成長し14歳になると母親をたたくと脅迫し、貴重品をせびるようになり、夫はその間に家にあった金品をあらいざらい持ちだして、失踪してしまう。やがて、Mayammaを悩ませた暴力をふるう息子は病で亡くなり、家に残っていたわずかばかりの「ぼろ」(“rags”, 82) をMayammaは息子の遺体と共に茶毘にふした灰を川に流し、村を出て、Parvatiamma (Deviの義母) の家で受け入れてもらうことになる。“From that day, ...Parvatiamma was my sister, my mother, my daughter.” (82) とあるように、MayammaとParvatiammaの二人の女性は境遇もカーストも教育も世代も異なるが、共に固い絆で結ばれることになる。この絆の輪の中にやがてDeviも加わることになる。

夫、息子、義母という家父長制を支える担い手たちに虐待されてきたMayammaは、夫を残して家をでた妻、すなわちthe law of thersouldという女性を家庭に縛り付け自由を許さない法、を破ったいわゆる「墮ちた女」とのレッテルをはられることになる。Parvatiammaに安住の地を見つけることになる。そして、今度はMayammaが不妊に悩み、治療にあたった無神経な医師の対応に傷ついたDeviを支えることになる。かつて、Deviが

夏と一緒にすごした祖母もまた見捨てられた妻たちを暖かく受け入れ、避難所を提供していた。祖母自身、三十代で寡婦となり、家と庭の周囲から出ることなく余生を過ごした。Deviの母親Sitaもまた寡婦としての世間からの屈辱的視線に苦しんだ。Sitaは自己犠牲の権化であるGandhari⁵の現代版のような女性である。Veenaの才能と名声を夢見て研鑽を積んできた少女のかき鳴らす音は、夫となる人の家族をも陶酔に誘うほどであったが、嫁としての義務が最優先されるべき結婚生活において、彼女は溢れるばかりの音楽の才能を断念し、怒りを身体の内におさめて、プライドゆえに自虐的良妻を演じることを決意し、従順な嫁、献身的な妻となることを結婚の祭壇に誓う。それは成功をおさめたかのようにだった。だが、夫の死後、寡婦差別の視線に苦しむSitaの自己犠牲の人生は空しいものとなる。プルダの慣習は妻を家庭の領域に幽閉する権利を夫がもち、妻は自由に家を離れることができない。寡婦もまた不吉な存在として世間の目に触れることを忌み嫌われ、隔離される。こういった形の強制的社会的孤立はDVそのものである。M. Lalが示唆しているように、ラーマの妻Sitaはこの法を破った女性— “one who has crossed the threshold, the boundaries of home, and for “women”, a step over the bar is an act of transgression” (Lal, *The Laws of the Threshold* 12) —であり、逸脱行為への制裁を受ける。

ここでこういった逸脱をした女性たちの支えあう関係、姉妹的絆に注目してみたい。これまで見てきたそれぞれのテキストの女性たちは忍耐強く、自己犠牲的シータ型女性であるか、反シータ的「墮ちた」女性、あるいは反抗的新しい女であり、どちらもシータをめぐる二極分化の罫にはまっているように見える。だが、視点を切り替え、どのような社会的評価を受けているかにかかわらず、女であることで受ける屈辱、痛みを通して築かれる彼らの支えあうネットワークに注目してみると、DeviとParvatiammaとの目に見えない絆、あるいは寡婦となった母の人生を読み直そうとする娘Deviと母Sitaに再構築される可能性のある絆や、DeviとAnnapurnaとのエロティックな姉妹関係が、権力の誤用という暴力に立ち向かう基本になっていることを、このテキストはDeviを取り巻く多様な女性たちの人生を描き分ける中で、Deviの共感にみちた視線と語りの力によって描いていることがわかる。物理的、精神的拠り所、避難所となり、エンパワーの契機となるこういった関係は、オブセッションとなっている自己否定的シータ神話やヒンドゥー原理主義者が唱える伝統的女性イメージや無神経なメディアが再生産する理想の女性へのイメージに対抗する力を持つもので、そういう点でこのテキストは独自の地位を占めている。また、虐待される「女性の身体」を描く上で、「不妊」あるいは生殖能力の賛美のディスコースを書き換える母性の拒否という文脈において、女性への抑圧の構造を顕在化させているという点でも興味深いテキストと言える。

短編“The Remains of the Feast” (1992) では、Hariharanは90歳のバラモン階層の寡婦、Rukuminiが突如、不可食の食べ物を貪り始め、やがてそれが寡婦にとって禁じられたものすべてに対する欲望をも含む要求となり、欲望の塊となった「身体」が病の床で反抗の歓喜に包まれる様子を描いた。不浄を忌避するバラモン文化社会の視点からは、この老い、病んだ、不可食のもので穢れた女性はおぞましい存在でしかないのだろうが、曾祖母に注がれる情愛にみちたひ孫である語り手の視線と、作者独特のユーモアによって、二人が共謀して興じる夜毎の「饗宴」が繰り広げられる秘密の部屋は楽しげな空間となり、Rukuminiはシータとは対極にある、鮮烈な印象を残す主人公、いわば、新しい女性となる。

彼女はDesiring Subjectとして人生最後の時を生き、結果として、病と死を楯にしてタブーへの挑戦者となる。

Thousand Faces of Night ではこのような積極的な抵抗を示す、反逆的身体は表象されていない。例外は主人公Deviの義母とMayamaの叔母のLakshmiamaであるが、前者は家出し、テキストには登場しない「不在」の人物としてDeviの憧れの女性となり、後者はエピソードとして語られる人物であるが、そのコミカルなしたたかさが忘れがたい印象を残す。一人息子と離れて一人暮らしをする70近い母は息子の送金が途絶え、村人への愚痴も尽きた時、とんでもないことを実行する。彼女は3日間家に閉じこもりきりになったかと思うと、4日めの朝ヴェランダに姿を表し、やがて真裸で座り込みを決行する。村人の目には彼女は気がふれたと映り、女が長生きしすぎたためであろう、とうわさする。しかし、村全体が騒然となるのも完全無視し彼女はひたすら黙って座りつづける。やがて、村人は彼女が“a half-smile of triumph on her face” (126) うっすらと勝ち誇った表情をうかべて、やっと訪れた息子をバス停まで送る姿を目撃することになる。女であることの「源」であるとされる、“shame”を逆手に取った戦略を自らの身体で実行するLakshmiamaによって、おんなの身体のイメージが修正されている。

V

最後にパキスタンの作家、B. Sidhwaの*The Pakistani Bride* (1983) という、女性に対する暴力が中心的テーマになっているテキストを見てみたい。このテキストにおいても、女性同士の「友情」が描かれている。主人公のZaitoonは山岳民族出身のQasimの養女としてLahoreで育つが、父親のQasimは故郷を懐かしみ、娘を同じ民族の男性に嫁がせる約束をする。だが、夫は冷酷で不可解な男であり、この民族の掟では逃走した妻への制裁は死であるということを知る。それでも、自分にとってのサヴァイヴァルは脱出以外にはないと彼女は決意し、そこから命がけの壮絶な逃走のドラマが展開し、最後にZaitoonは救出される。

このテキストにおいて、Zaitoonを始め理不尽な女性虐待に悩む女性たちの存在に目覚め、Zaitoon救出への意欲を示す女性がいる。パキスタン人と結婚したアメリカ人の女性Carolである。“Carol felt a compulsion to help her[Zaitoon], even at risk to herself.” (223) 彼女は単なる疑惑のみで殺害されたり、鼻を殺ぎ落とされたりする女性たちの現実を知り、驚愕する。Carolはこの逃亡した女性の運命を通して、自分の状況を垣間見たように思い、甘い幻想から目覚める。と同時に、虐げられる女性たちの厳しい現実の下だからこそ、女性たちの間で「熱い友情」が育まれていることに納得する。“No wonder here formed such intense friendships to protect themselves where physical might outweighs the subtler strengths of womanhood.” (228) 男たちの定めた規範のために犠牲になってきた女性たちの苦しみを通して、女性同士の密かな心のつながりがみられる、より印象的な場面はZaitoonと義母の関係にみられる。息子に虐待される母親Hamidaを義理の娘Zaitoonがかばう場面と、Zaitoonの逃亡を知ったときの義母の抑圧されてきた思いが噴出する場面にそれは見られる。殺しかねないほど牛を虐待する息子を必死に止めようとする母親を息子のSakhiは押しのける。押し退けられても牛をかばおうとする母親に息子は半狂乱の怒りを

爆発させ、棒が振り上げられ、母親の肩を直撃する。坂道をかにのように逃げ回る母を追う息子。一撃が母の脚にあたり、彼女は前に倒れ込む。Hamidaを追いかけていたZaitoonの驚愕の表情や村の女性たちがあちこちからかけつける様子が続く。“For God’s sake stop it,” “For God’s sake, you’ll kill her!” と泣きながら懇願するZaitoon。だが、棒を取り上げようとする彼女の手をSakhiはしたたかに打つ。それでも、彼女がかまわず棒をもぎ取ると、彼は“You are my woman! I’ll teach you to obey me!” (172-73) とわめきながら、彼女の腿や頭部を打ちつける。彼女が前のめりに倒れた、その時、女たちの金切り声が彼に浴びせられ、彼は棒を投げ捨て立ち去る。老いた義母は地べたに擦り切れた毛布にくるまって不気味な程静かに横たわっていた。

このような状況が日常的に繰り返される中で、Zaitoonは自己防衛のために彼のいる前では苦痛を感じないですむように麻痺した状態に陥った。彼は些細な理由で彼女を折檻したが、親切と冷酷を繰り返すという、DVの加害者の典型的パターンを示したことが描かれる。今では彼女は夫の怒りを静めるためにだけ生きているようなもので、命令以外には耳を閉ざして過ごす日々が続いている内に、彼女の目も義母のように不安に満ち、追従的なものになってしまった。だが、ある日、夫に行くなと禁じられていた川にZaitoonは出かけ、道路の見えるところに来て、一台のジープに手を振っていたところを夫に見とめられてしまう。夫の投じる石つぶてを背中、そして頭部に受け、恐怖におちいった、この時の事件が契機となって、彼女はここでの生活に身の危険を感じ、ついには逃亡を決意することになる。彼の情け容赦ない暴行は次のように描写されている。

... ‘You whore,’ he hissed. His fury was so intense she thought he would kill her. He cleared his throat and spat full in her face. ‘You dirty, black little bitch, waving at those pigs...’ ... ‘...You wanted him to stop and fuck you, didn’t you!’

Zaitoon stood in a cataleptic trance....

He slapped her hard, and swinging her pitilessly by the arm, as a child swings a doll, he flung her from him. A sharp flint cut into her breast, and in a wild lunge she blindly butted her head between man’s legs... (185-86)

必死に抵抗する中で、彼女は偶然Sakhiのズボンのひもを解く原因をつくり、男にとっての最大の恥辱をなめさせられたSakhiは一瞬凍りつき、たけり狂った彼はZaitoonを何度もけりつける。

ついにZaitoonは逃亡する。“There was only one punishment for a runaway wife.” (190) 逃亡した妻への制裁は死しかないというのが、彼女が嫁いだ部族の掟だった。“They’ll be back soon with that bitch’s corpse, your son’s honour vindicated!” と慰める部族の女たち。だが、死体がかついで戻ってくる男たちによって、息子の名誉は回復すると慰める女たちの真中にいて、Hamidaが無意識に現れた「笑い」を見られないようにひざに隠す、とある点は注目すべきところである。Hamidaの心の内では大きな変化が生じていた。

Honour! she thought bitterly. Everything for honour and another life lost! Her loved ones dead and now the girl she was beginning to hold so dear sacrificed. She knew the

infallibility of the mountain huntsmen....she, who had been so proud and valiant and wholeheartedly subservient to the ruthless code of her forebears, now loathed it with all her heart. (190-91)

Hamidaは男たちの無情な規範に盲目的に従い、それを誇りにしてきたが、それを今は心底嫌悪した。男の名誉のために逃亡した妻は死の報いをうけるべきという、規範を内面化しているかにみえる女たちのなかで、Hamidaの心のなかでは反逆の思いが沸き起こっていた。Hamidaが女性たち自身を抑圧してきた規範に呪縛されてきたことを初めてはっきり悟ったことを示唆するものである。すでに疑惑を秘めていたHamidaにこの覚醒をうながしたのは死を覚悟した義理の娘の決意だった。Carolは男による女性への虐待が許容される社会では女性同士の熱い友情が育まれるのも不思議はない、と感じるが、それを印象づける小説となっている。Sidhwaはこういった女性の連帯・友情の神話を*Ice-Candy Man* (1988) においてより強力に作りあげている。

VI

女性の行動の自由を阻む慣習や女性への虐待をSitaのように耐える、抑圧的規範を内面化している女性たちを描きながら、そういった女性たちの中に、芽生えた内なる反逆の多様な「声」をインドの英語作家たちは描き分け続けている。そして、*God of Small Things* のAmmuや*The Long Silence* (1988) のJaya⁶のような不敵なAnti-Sitaモデルや、命がけでソーシャルワーカーとして働く、滑稽な身体をもつIlaの描出以外に注目すべきは、反抗心を秘め孤独に生きる女性たちの密かな出会い、連帯、きずなに脱出の可能性のあることを示唆するテキストが目立つことである。挫折する抵抗の物語が多い中で、女性同士の多様な連帯、友情が生彩を放つ物語を作り上げているという点で、Hariharan, Sidhwaの物語は注目に値する。特に、Hariharanのテキストでは主人公の主体形成の物語が、他者を無限に作り出すという現実の構造の中にあっても、流動的に他の女性たちと繋がるような形で展開されるという点で意義深いものといえる。多様な差異軸が無限に増殖する中で、共通の基盤というイメージを喪失しかけている状況に、女同士の密かな共謀性のドラマは新鮮な衝撃を与えてくれる。

注

1. 2004年8月27日の*Times of India, New Delhi*にはNoidaでのダウリ殺人について、首にロープを巻かれた絞殺死体の写真と仲睦まじい時の二人（加害者の夫と被害者の妻）の写真付で報告されている。二人ともエンジニアで同じ大学で知り合い、同じ会社に勤務していたミドル・クラス出身者である。夫の父親からの執拗なダウリ要求が続いていた矢先のことであった。妻は絞殺された後、ベッドの簞笥に投げ込まれていた。掲載された無残な写真は夫が殺害後に撮影したものである。また、2004年9月1日の*The Telegraph, Calcutta*には不貞の疑惑から日常的に夫から暴行されていた妻が、4人の子供と共に夫にすきで虐殺された事件（夫もその後自殺）が掲載されている（Midnapore）。これらは毎年女性に対して加えられる犯罪の氷山の一角にすぎない。

詳しい資料は「インド英語文学にみるシータの娘たち（I）」「都留文科大学紀要」第60集注3を参照。

2. 英語教育を受けたミドル・クラスのリベラルな女性に人気の3大女性誌、*Femina*, *New Woman*, *Woman's Era*には悩み相談コーナーがあり、女性の厳しい現実の一面を覗かせてくれるが、華やかで、自由な雰囲気にあふれた写真の掲載に見合う、伸びやかに活躍する女性の語る成功談や、自己形成やキャリア形成、恋人関係や結婚生活の成功の秘訣などを含む前向きな記事が圧倒的に多く、自由と幸福をつかむ女性の神話形成に貢献している。もっとも人気のある*Femina*に特徴的なのは母と娘の物語、その友情と支えあいの物語が多いことである。
3. 筆者が2000年12月から2001年3月までインド滞在中、結婚の有無もさることながら、子供の有無を問われなかった日はほとんどなく、多い時は日に10回以上も同じ質問を受けることがあったという事実からも、インドの人々にとって子供の有無（ただし、男子が関心の中心）は最大の関心事であることがうかがえる。ある力車の運転手は子供がいないのは「人生における最大」の不幸だと述べていた。
4. Bumillerの*May You be the Mother of a Hundred Sons*を参照。インドの出版物の両親への献辞においても、母親は父親の前に献辞を受けるのが通例となっていると語るのはインド憲法についての詩*People the Constitution and its Pillars* (2001) の著者Arun Kumar Jahである。
5. Deviの祖母の子供時代の物語に登場するGandhariとは、婚礼の日、夫の宮殿で始めて相手が盲目であることを知り、矜持と怒りに駆られ黙したかかと思うと、婚礼の朱色のサリーを引き裂き自らの目を覆い、生涯夫と同じ運命を受容することを示した自己犠牲の権化のような王女。
6. 「都留文科大学紀要」第60集注10を参照。

Bibliography

- Acharya, Milly. *The Ramayana for Young Readers*. Harper Collins Publishers India, 2001.
- Andermahr, Sonya and Lovell, Terry and Wolkowitz, Carol. Eds. *A Concise Glossary of Feminist Theory*. London and N. Y.: Arnold, 1997.
- Bagchi, Jasodhara. Ed. *Indian Women: Myth and Reality*. Hyderabad: Sangam Books, 1995.
- Bhai, L. Thara. *Widows in India*. Delhi: B. R. Publishing Co., 2004.
- Bhattacharya, Rinki Ed. *Behind Closed Doors: Domestic Violence in India*. New Delhi: Sage Publications, 2004.
- Bhelande, Anjali & Pendurang, Mala. *Articulating Gender*. Delhi: Pencraft International, 2000.
- Buck, William. Trans. and Retold. *Ramayana*. Los Angeles: Univ. of California Press, 1976.
- Bumiller, Elisabeth. *May You Be the Mother of a Hundred Sons: A Journey Among the Women of India*. 1990. New Delhi: Penguin, 1991.
- Chakravarti, Uma & Gill, Preeti. Eds. *Shadow Lives: Writings on Widowhood*. New Delhi: Kali for Women, 2001.
- . *Rewriting History: The Life and Times of Pandita Ramabai*. Delhi: Kali for Women,

- 1998.
- Chen, Martha Alter. Ed. *Widows in India*. Delhi: Sage, 1998.
- . *Perpetual Mourning: Widowhood in Rural India*. Delhi: Oxford UP, 2000.
- Chhachhi, Amrita. “The State, Religious Fundamentalism and Women: Trends in South Asia.” *Economic and Political Weekly*. March 18, 1989.
- Desai, Anita. *Fire on the Mountain*. 1977. London: Vintage, 1999.
- . *Fasting, Feasting*. London: Chatto & Windus, 1999.
- Devi, Ashapura. “Indian Women: Myth and Reality.” *Indian Women: Myth and Reality*. Ed. Jasodhara Bagchi. Hyderabad: Sangam Books, 1995.
- Dhawan, R. K. *Indian Women Novelists: An Anthology of Critical Essays*. New Delhi: Prestige, 1st set 5 vols, 1991, 2nd set 6 vols., 1993, 3rd set 7 vols, 1995.
- Desai, Neera. *Women in Indian Society*. New Delhi: National Book Trust, India, 2001.
- Devi, Phoolan. *Moi, Phoolan Devi*. 1996 : 武者圭子訳『女盗賊プーラン』上・下巻 草思社 1997年。
- Doniger, Wendy and Smith, Brian K. Trans. *The Laws of Manu*. New Delhi: Penguin, 1991.
- Durrani, Tehmina. *My Feudal Lord*. 1994. London: Corgi Books, 1998.
- Dworkin, Andrea. *Intercourse*. New York: Macmillan, 1987.
- Gandhi, M. K. *India of My Dreams*. Compiled. Rajendra Prasad. 1947. Ahmedabad: Navajivan Publishing House, 1999.
- Hariharan, Githa. *The Thousand Faces of Night*. 1992. London: The Women’s Press, 1996.
- . “The Remains of the Feast” *The Art of Dying*. New Delhi: Penguin, 1993.
- 井筒俊彦訳『コーラン』上・下 岩波文庫 1985年。
- Jain, Naresh K. *Women in Indo-Anglican Fiction: Tradition and Modernity*. Manohar, 1998.
- Jung, Anees. *Unveiling India: A Woman’s Journey*. New Delhi: Penguin, 1987.
- 河田清史『ラーマーヤナ』上・下 第三文明社 2000年。
- Kapur, Promilla. *The Indian Call Girls*. 1979. New Delhi, Bombay: Orient Paperbacks, 1994.
- Krishnan, S. Ed. *Memories of Malgudi*. New Delhi: Penguin, 2000.
- Krishnaraj, Maithreyi. “Motherhood: Power and Powerless.” *Indian Women: Myth and Reality*. Ed. Jasodhara Bagchi. Hyderabad: Sangam Books, 1995.
- Kurup, C. G. R. *Rendered. The Ramayana*. Children’s Book Trust, 2002.
- Lal, Malashri. *The Law of the Threshold: Woman Writers in Indian English*. 1995. Rashtrapatinivas Shimla: Indian Institute of Advanced Study, 2000.
- Mohanty, Manoranjan. Ed. *Class, Caste, Gender*. Readings in Indian Government and Politics 5. New Delhi, Thousand Oaks, London: Sage Publications, 2004.
- Mukherjee, Bharati. *Jasmine*. 1989. London: Virago, 1998. p. 15.
- Muller, F. Max. Ed. *Sacred Books of the East : The Law of Manu*. Delhi: Motilal Banarsidass Publishers, 2001.
- Narayan, R. K. *Dark Room*. 1938. *Memories of Malgudi*. Ed. S. Krishnan. New Delhi: Penguin, 2000.
- Nasrin, Taslima. Trans. Gupta, Tutul. *Lajja*. Delhi: Penguin, 1993.

- Pati, R. N. *Adolescent Girls*. New Delhi: A. P. H. Publishing Co., 2004.
- Pickthall, Marmaduke. Trans. *The Koran*. 1909; London: Everyman Publishers, 1992.
- Ray, Sangeeta. *Engendering India: Woman and Nation in Colonial Postcolonial Narratives*. Durham and London: Duke UP, 2000.
- Riddle, Joanna & Joshi, Rama. *Daughters of Independence: Gender, Caste and Class in India*. New Jersey: Rutgers UP, 1989.
- Roy, Arundhati. *The God of Small Things*. London: Flamingo, 1997.
- Rushdie, Salman. *Midnight Children*. 1981: Vintage, 1995.
- Rushdie, Salman and West, Elizabeth. Eds. *The Vintage Book of Indian Writing 1947-1997*. London: Vintage, 1997.
- Sidhwa, Bapshi. *The Pakistani Bride*. Penguin, 1983.
- Sarbadhikary, Krishna. “Mapping the Future: Indian Women Writing Female Subjectivities.” *Articulating Gender*. Delhi: Pencraft International, 2000.
- Sirohi, Seema. *Sita's Curse*. New Delhi: Harper Collins Publishers India, 2003.
- Victor, Barbara. *Army of Roses*. *Observer Statistical Handbook*. Rupa Co. in association with Observer Research Foundation, 2004.
- Statistical Abstract India 2002*. Central Statistical Organisation, Ministry of Statistics & Programme Implementation, government of India, New Delhi, 2003.

* この論文はJeffrey Herrick教授との研究会による成果であり、都留文科大学大学院文学研究科「共同研究費」によるものである。